

# 藤原宮運河 SD1901A 出土の瓦

## — 第20次調査から

はじめに 藤原宮の運河SD1901Aは宮造営のための資材を運搬した運河とされ、藤原宮内のほぼ中心を南北に流れる。SD1901Aは宮完成時には埋め立てられ、その上には大極殿が建つ。したがってSD1901Aから出土した資料は、確実に藤原宮完成以前のものといえる。瓦に関しては、SD1901Aからの出土は多くはないものの、第20次大極殿北方の調査（『藤原概報8』）で一定量の瓦が出土している。本稿では、これらの瓦について報告し、宮造営の瓦生産について若干の考察を加える。

藤原宮運河SD1901Aについて SD1901Aは、第18・20・83-7・153・169次調査では平面的に（『藤原概報6』、『年報1998-II』、『紀要2009』、本号87頁）、第148・163次調査では断面でその存在を確認している（『紀要2008・2011』）。運河の幅は3～12m、深さは2m。これまで検出したSD1901Aの総延長は570m以上にも及ぶ。第20次調査におけるSD1901Aのおおよその層位は、上から①層：整地層・最上層・第1層、②層：黒灰土層・暗灰土層、③層：砂層・粗砂層の順である<sup>1)</sup>。最下層である③層は流水層で、第153次調査の所見と合わせても、運河が機能していた時期の層であろう。②層は運河を埋め立てた層、①層は運河を埋め立てた後の整地層と判断できる。③層からは、天武11～13年（682～684）、および天武14年（685）に制定された冠位「進大肆」と記された木簡が出土しており（『藤原宮木簡二』）、SD1901Aが機能していた時期が天武末年まで遡る可能性が高い。SD1901Aがいつ埋め立てられたかは不明だが、『日本書紀』には、持統9年（695）1月に「公卿大夫を内裏に饗す」という記事がみえる。内裏は大極殿と同じくSD1901Aの上に建つことから、運河を埋め立てて内裏を建設する期間を考慮しても、藤原宮遷都の年である694年より以前に運河の機能を停止し、埋められたと考えられる。

第20次調査SD1901A出土の瓦 第20次調査で検出したSD1901A出土軒瓦に関しては、これまで変形忍冬唐草文軒平瓦6646Gのみ報告されていたが（花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅻ』奈文研、2000など）、その他にも軒丸瓦2点、軒平瓦6点を確認した。ただし、SD1901A機能時の層である③層からは軒瓦は出土していない。

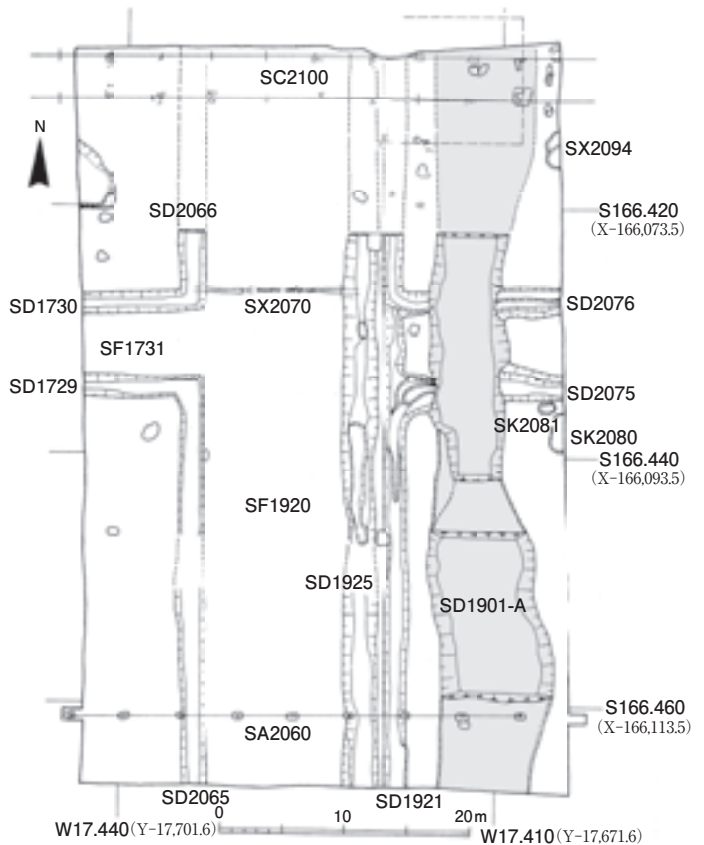


図129 第20次調査遺構図 1:600 (( )内の座標は世界測地系)

1～5は②層出土資料。1・2は、軒丸瓦6279B。いずれもクサリ礫を含まず、長石・石英を大量に含むN/Pグループの胎土（石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究Ⅴ』奈文研、2010）。1の丸瓦接合部分から、丸瓦先端の凸面側がカットされていたことがわかる。3は軒平瓦6643Aa。日高山瓦窯からQグループへ範が移動した後の資料。4は軒平瓦6641型式か。5は軒平瓦6646Gの小片。6～10は①層出土資料。6は軒丸瓦6175A。瓦当外縁部は削らない。高台・峰寺瓦窯産。7は軒平瓦6643C。顎部の段が強い。胎土はN/Pグループ。8は軒平瓦6641Fの小片。内山・西田中瓦窯産。9は軒平瓦6641E。高台・峰寺瓦窯産で、顎部の段差はほとんどない。10は完形の軒平瓦6643Aa。顎部の段差が強く、凸面には縦縄叩きのち狭端部分にカキ目をほどこす。日高山瓦窯産。

丸・平瓦については、紙面の都合上、③層出土のみ報告する。丸瓦は6点(2.8kg)、平瓦は7点(2.9kg)出土した。11～13は丸瓦。11は玉縁の両隅を打ち欠く。凹面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。側縁c3手法（大脇潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研、1991）で胎土はN/Pグループ。12は側縁a2手法であることや赤く堅緻な焼成から、日高山瓦窯産と判断できる。13は粘土紐の接合部で割れる。側縁b2手法で、胎土に砂粒を大量に含むQグループの資料。14・15は平瓦。14は、全長37.8cm。側縁c3手法で、N/Pグループの胎土。15は凸面に縦方向のハケ目をもつ。横断面には粘土板の合わせ目を確認できる。側縁手法はc1手法。これらのほ

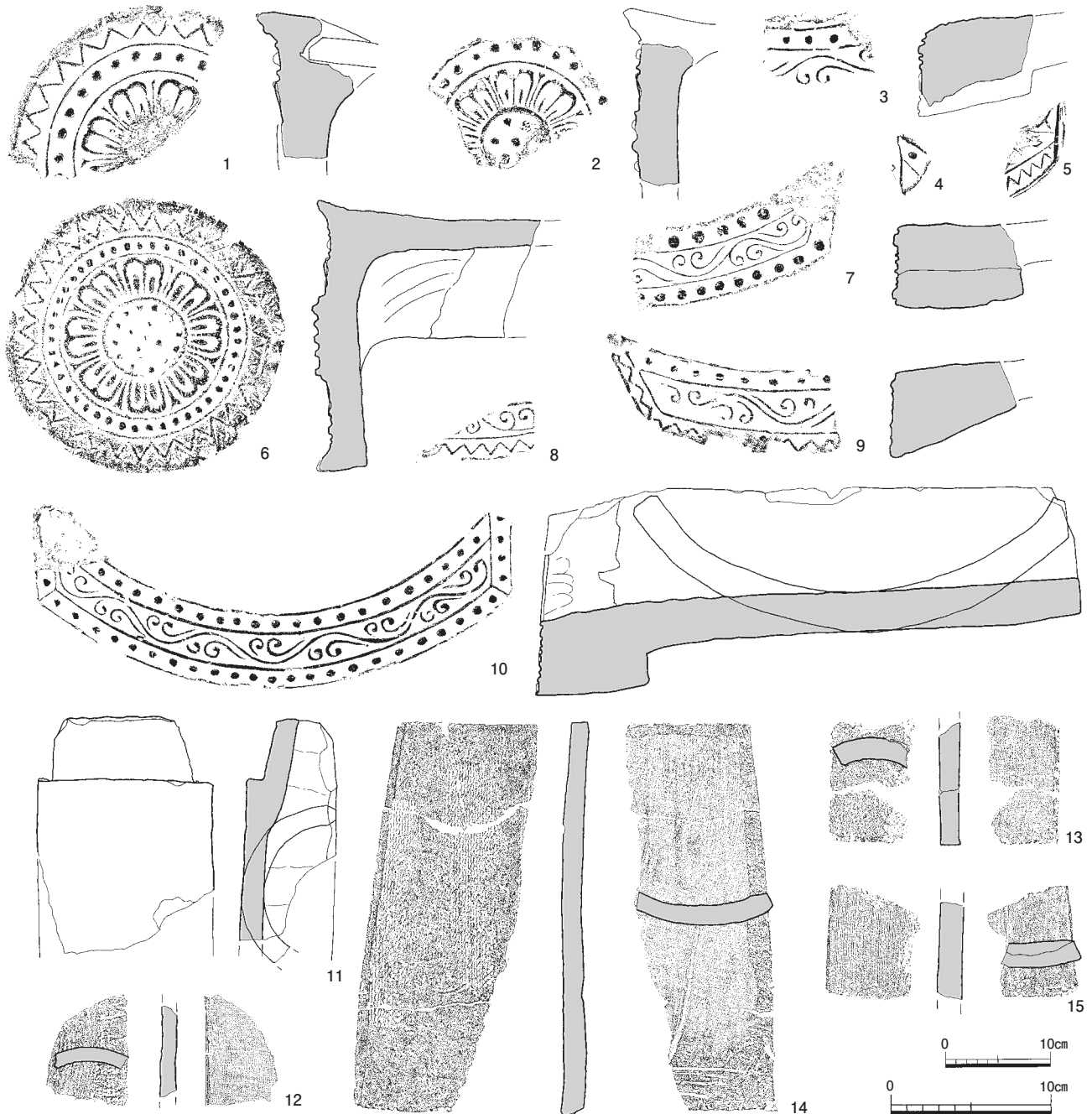


図130 第20次調査SD1901A出土瓦（軒瓦は1：4、丸・平瓦は1：6）

かに凹面に「キ」字状のヘラ書きがある平瓦を確認した。まとめ SD1901A機能時の層である③層からは軒瓦の出土はないが、丸・平瓦は出土することから、瓦の生産開始時期はやはり天武末年と考えてよい。③層から瓦の出土が少ないのは、この時点でまだ宮中枢部の造営が始まっておらず、瓦の搬入が本格的に始まっていなかったためであろう。また、③層から出土した丸・平瓦の胎土や技法から、運河機能時には、少なくともN/PグループとQグループの瓦窯および日高山瓦窯は操業していたことが判明した。これらの瓦窯はいずれも粘土紐を模骨に巻き付けて作る粘土紐技法をもちいる。粘土紐技法は、藤原宮の瓦生産で本格的に導入され、大和盆地内の瓦窯で集中的に生産される。従来、藤原宮瓦生産では、まず粘土板技法をもつ在来の瓦窯が先行し、その後さら

なる大量生産をめざして粘土紐技法を導入した瓦窯が新たに設置されると考えられてきた。しかし、粘土紐技法の瓦が天武末年紀年銘木簡にもなうことから、粘土紐技法の導入は藤原宮所用瓦の生産開始とほぼ同時であることが判明した。このことは藤原宮造営当初から積極的に新しい技術を取り入れて大量の瓦生産を計画的におこなっていたことを示す。このように、SD1901A出土の瓦は藤原宮造営時の瓦生産を知る重要な手がかりになる。近年SD1901Aの検出事例は蓄積されており、今後のさらなる調査に期待したい。（石田由紀子）

註

- 1) 『藤原宮木簡二』で示されたSD1901A層位との対応は、①層：1、②層：2、③層：3・4となる。なお第20次調査区を含めた正式報告の際に変更となる可能性もある。